

民間説話の伝播と変容

The Diffusion and Transformation of Folktales

伊藤清司

【論文要旨】

柳田國男や關敬吾が炭焼き長者初婚型、同再婚型と分類し、また凌純声・芮逸夫が竈神故事甲型、同じく乙型と分け、さらに丁乃通が負責主宰自己命運的公主型、乞丐不知有黄金型と命名し分類した民間説話は、日本列島、朝鮮半島、中国大陸、台湾、ベトナムなど東アジアの各地に数多く分布している。それらは、炭焼き男を主人公とする伝承が日本や朝鮮に顕著であるとか、おもに竈神由来譚として語られる伝承が中国やベトナムに多く、朝鮮には認められないなど、それぞれの地域的特色をもちつつも、両型ともその基本構造をほぼ同じくし、かつ多くのモチーフを共有している。そのため、この型の説話は伝播によって広がり、東アジア各地で受容されて地方色を帯びたと想定される。日本の炭焼き長者型ももちろんその例外ではない。

柳田はこの型の民間説話は木炭を燃料にして金属精錬・鍛冶・鋳造に従事する職能者たちによって伝承されてきた説話であると仮定した。しかしこれまで得られた朝鮮、中国、ベトナムの同型の資料からは、柳田の仮説を積極的に肯定できる明証を見いだすことはできない。そもそも柳田・關、あるいは凌・芮の分類は妥当か、その分類法は果して有意義か。また、金属工芸業者によって伝承されたと仮定される日本の炭焼き長者型説話は、東アジアに流布する同型伝承の古い姿をとどめているのか、それともそれは日本列島における特殊なoikotypeにすぎないのか。こうした課題は国際的な比較研究によって、はじめて解明していくものであろう。

比較研究の必要性は伝説研究の領域にも需められる。ややもすれば日本独自の伝説と考えられ、日本国内での比較にとどめられてきた伝説一たとえば白米城型、椀貸し淵型の中にも、隣接する東アジアの伝説との比較研究によって、その伝播や変容の過程を明らかにしていくことができる伝説が少なくないと考えられる。